

[寄稿]

韓国中学生の健全な情緒育成における音楽治療の効果

南銀祐¹⁾、金惠敬²⁾

キーワード：音楽治療、心理的健康

Study on Music Therapy for the Cultivation of Healthy Emotion in Male Middle School Students in Korea

Eun Woo Nam MPH, Ph.D¹⁾, Hae Kyung Kim, MA, RMT²⁾

Abstract

This study identifies the understanding of students and their parents of the music therapy available for cultivating emotional health in male middle school students and goes on to give objective data for evaluating the effects of music therapy. The questionnaire was distributed to 690 male students and 690 parents at a middle school in Busan in order to identify their understanding of the music therapy event conducted on Oct. 30, 2004. Before and after studies were used. The questionnaire before the music therapy event (the prior questionnaire) was carried out from Oct. 1 to 30, 2004 and the questionnaire after the music therapy event (the post questionnaire) from Nov. 5 to 20, 2004. The results of the study are summarized below.

27.6% of parents were already acquainted with the music therapy concept. 54.3% of parents had heard of it and 59.4% responded that music therapy was necessary in consideration of its effects. Moreover, 64.0% of parents answered that they would recommend the music therapy for their children if their children were selected to be subjects of music therapy. Next, when the thoughts of students and parents on the importance of music therapy were compared, the parents were found to be more interested in music therapy than the students ($p<.001$). Also, the awareness of students was higher than that of the parents in regard to the effects of music therapy ($p<.001$).

In conclusion, the understanding of male students about music therapy was improved through brief participation in intramural music therapy and their intention to enroll in music therapy was also enhanced. Furthermore, the parents recognized the importance of music therapy for the fostering of emotional health in their children. Moreover, the parents demonstrated more interest in the music therapy than the students. The study thus suggests

1) Institute of Health and Welfare Yonsei University Wonju Korea

2) Department of Music Education Graduate School of Education Kosin University Busan Korea

南銀祐：Yonsei University

[連絡先] 210-710 Institute of Health and Welfare Yonsei University
234-1 Maeji-ri, Heungup-myun, Wonju-city Ganwon-do, Korea
tel 82-33-760-2413 fax 82-33-762-9562

that a variety of music therapies and research need to be done to cultivate the emotional health of teenagers.

Key words : Music therapy, Emotional health

和文要約

先進諸国においては、音楽治療活動が集中力や記憶力などにとどまらず、自尊心や責任感の向上及び情緒育成に有効であることが明らかにされつつある。しかしながら、その実証的研究は非常に限られており、それゆえ音楽治療の普及が妨げられている現状にある。そこで、本研究においては、男子中学生及び保護者を対象として、音楽治療活動に関する認識、すなわち音楽治療活動に関する理解度や効果への期待、生徒の情緒不安要因への責任及び解決方法に関して調査を行ったので報告する。

I はじめに

男子中学生は、12歳から16歳であり、身体が急速に成長し、高等学校入試による重圧感とともに、人生について多様な考えをするようになる重要な時期にある。また、彼らは思春期にあり、交友関係や学校生活におけるいじめ、理性問題、サイバー暴力等に悩む年頃である。そのようななかで、青少年の問題行動の原因は、遺伝学や生物学、教育学、心理学、精神医学、社会病理学、刑事政策学、社会事業学など多岐に渡る学問領域から研究がなされている。そして、青少年問題解決のために、相談事業やオルタナティブ・スクールなど多様な方法が示され、音楽治療 (music therapy) はそのうちの一つである¹⁾。

現代の音楽治療 (日本では、音楽療法である) は、第二次世界大戦をきっかけにアメリカ陸軍病院で始まった。負傷兵に共通の障害は、戦争からのストレスによる心身症と精神神経症であり、戦争を契機として心身医学が発達を始めると同時に、その

一環として音楽の活用が導入されるようになったのである。また、キリスト教文化圏では、中世期から教会に医療施設があり、神の力を求めて病床で宗教音楽が提供されていた。聖歌は神との交流の証として受け入れられていたのである。そして、戦後になると青少年非行や家族不和に対処するために音楽療法が使われ始め、音楽治療の専門職として音楽治療士 (Music Therapist) の養成が始まった²⁾。日本では、音楽治療は音楽療法と呼ばれており、治療的概念から少し後退した用語として使われている。日本音楽療法学会では、音楽療法に関する研究が発表されており、音大の音楽療法専攻から医科大学の精神科医を中心にした音楽療法研究会まで、多様な音楽療法活動が行われている。主な研究分野は、精神病院における音楽療法、発達障害と音楽療法、老人病患者の音楽療法、自閉症児と音楽療法、身体障害児と音楽療法等である。

音楽治療では治療目的、すなわち身体精神の回復と維持、向上のために音楽が用いられる。例えば、音楽治療の実施が脳卒中患者の血圧と脈拍に肯定的な影響を及ぼすことが報告されている³⁾。したがって、音楽治療士は、治療的環境の中で音楽を段階的に用い、治療対象者の行動を望ましい方向に変化させることを支援する。このような音楽治療の最終的な目的は、身体的、社会的、認知的、言語的発達を促し、社会の構成員としての生活を営むことができるようにすることである。

音楽治療に関する研究を概観すると、問題児や障害を持つ生徒を対象にした研究は行なわれているが⁴⁾、生徒を対象にした研究はまだ報告されていない。今後、音楽治療

の普及のためには、正常な生徒が音楽治療に関して良い認識を持つことが必要であり、特に入試に重点が置かれる教育風土では保護者らの認識も重要である。そこで、本研究では、校内音楽治療活動の効果に関する生徒と保護者の認識を調査・分析を行なったので報告する。

II 研究目的

男子中学生を対象とする音楽治療活動の効果に関する生徒や保護者の認識を把握することにより、現在実施されている音楽治療活動に関する客観的な評価資料を提示し、今後の中学生を対象とした音楽治療プログラムの開発に資することを目的とした。

III 研究方法

1. 調査対象及び方法

調査対象は、釜山地域にある男子中学校の生徒690人と保護者690人である。調査は、音楽治療活動の認識などに関するアンケートを、2004年10月1日から2004年11月20日の期間に2回実施した。すなわち、活動参加前の音楽治療活動に対する認識の把握を目的として、事前調査（第1回アンケート調査）を2004年10月1日から2004年10

月10日の期間において実施した。そして、2004年10月30日に開催された文化祭において音楽治療活動を実施した後、2004年10月30日から2004年11月20日の期間において事後調査（第2回アンケート）を実施した。

2. 音楽治療の実施

定期的に行われている校内音楽治療活動とは別の活動として、文化祭において全校生徒を対象として音楽治療を実施した。なお、文化祭における具体的な音楽治療の概要については、表1に示す通りである。

3. 統計分析

音楽治療活動に関する生徒および保護者の認識に関する事前、事後調査分析においては、質問項目ごとでの単純集計を行なうとともに、認識に関する前後比較を χ^2 検定により検討を行った。なお、全ての統計分析にはSPSS (Statistical Package for Social Sciences) を用いた。

IV 結果

1. 回答状況

事前調査と事後調査の回答状況は表2に示す通りである。生徒については、事前調

表1 文化祭の概要

•日	時：2004年10月30日
•場	所：釜山広域市生徒教育文化会館
•参加生徒数	：690人
•内	容：生徒による学芸発表
•実	施者：音楽治療士1人、他20人
•利用楽器名	：小鼓、大鼓、棒鼓、ペダルドラム等、4楽器
•音楽治療曲名	：乱打公演
•所要時間	：3時間のうち音楽文化祭の中で乱打公演を15分間実施

表2 調査票の回答状況

単位：人 (%)

学年	生徒		保護者	
	事前調査	事後調査	事前調査	事後調査
1	204 (31.1)	234 (34.2)	218 (34.5)	208 (32.6)
2	235 (35.8)	233 (34.0)	213 (33.8)	225 (35.2)
3	217 (33.1)	218 (31.8)	200 (31.7)	206 (32.2)
計	656 (100.0)	685 (100.0)	631 (100.0)	639 (100.0)

査時は 656 人、事後調査時は 685 人であった。また、保護者についてみると、事前調査時は 631 人、事後調査時は 639 人であった。

2. 事前調査

1) 生徒

音楽治療活動の効果に関する認識の回答結果を表 3 に示した。「音楽治療活動の効果」に関しては、「大きい」と回答した生徒は 101 人 (15.5%) であった。「集中力や記憶力、責任感、創意力に対する効果」に関しては、「大きい」と回答した生徒は 96 人 (14.8%) であった。「全校生への効果」に関しては、「大きい」と回答した生徒が 68 人 (10.5%) であった。「音楽治療への参加意思」に関しては、「少し必要である」と回答した生徒が 258 人 (39.8%) で最も多く、「必要である」と回答した生徒と合わせると 290 人 (44.7%) であった。なお、全体的にみると、高学年に比べて低学年の方が、音楽治療の効果に関して肯定的な回答傾向にあることが示された。

2) 保護者

音楽治療活動の効果に関する認識の回答結果を表 4 に示した。「音楽治療の効果」に関しては、「大きい」と回答した保護者は 116 人 (18.5%) であった。「集中力や記憶力、責任感、創意力への効果」に関しては、「大きい」と回答した保護者が最も多く 121 人 (19.4%) であった。「全校生に対する効果」に関しては、「大きい」が 68 人 (10.8%) と最も多かった。「子どもが音楽治療の対象者である場合の勧奨意思」に関しては、「子どもが希望すれば勧める」が最も多く 399 人 (64.0%) であり、「積極的に勧める」と合わせると勧奨意思のある保護者は 481 人 (77.2%) であった。

3. 事後調査

1) 生徒

音楽治療の効果に関する認識を表 5 に示す。「音楽治療の効果」に関しては、「大きい」と回答した者は 105 人 (15.6%) であっ

表 3 事前調査における音楽治療の効果に関する生徒の認識

単位：人 (%)

項目	学年				全体
	1	2	3		
音楽治療の効果	大きい	34 (16.8)	40 (17.2)	27 (12.5)	101 (15.5)
	小さい	121 (59.9)	137 (58.8)	140 (64.8)	398 (61.1)
	なし	12 (5.9)	21 (9.0)	26 (12.0)	59 (9.1)
	分からない	35 (17.3)	35 (15.0)	23 (10.6)	93 (14.3)
	合計	202 (100.0)	233 (100.0)	216 (100.0)	651 (100.0)
集中力や記憶力、責任感、創意力への効果	大きい	39 (19.2)	34 (14.7)	23 (10.7)	96 (14.8)
	小さい	110 (54.2)	121 (52.2)	111 (51.9)	342 (52.7)
	なし	29 (14.3)	35 (15.1)	40 (18.7)	104 (16.0)
	分からない	25 (12.3)	42 (18.1)	40 (18.7)	107 (16.5)
	合計	203 (100.0)	232 (100.0)	214 (100.0)	649 (100.0)
全校生への効果	大きい	21 (10.4)	26 (11.2)	21 (9.8)	68 (10.5)
	小さい	98 (48.8)	80 (34.3)	84 (39.3)	262 (40.4)
	なし	23 (11.4)	36 (15.5)	34 (15.9)	93 (14.4)
	分からない	59 (29.4)	91 (39.1)	75 (35.0)	225 (34.7)
	合計	201 (100.0)	233 (100.0)	214 (100.0)	648 (100.0)
音楽治療への参加意思	必要である	10 (5.0)	5 (2.1)	17 (7.9)	32 (4.9)
	少し必要である	94 (46.8)	91 (39.1)	73 (34.1)	258 (39.8)
	殆ど必要なし	58 (28.9)	89 (38.2)	70 (32.7)	217 (33.5)
	全く必要なし	39 (19.4)	48 (20.6)	54 (25.2)	141 (21.8)
	合計	201 (100.0)	233 (100.0)	214 (100.0)	648 (100.0)

表4 事前調査における音楽治療の効果に関する保護者の認識

単位：人 (%)

項目		学年			全体
		1	2	3	
音楽治療の効果	大きい	46 (21.3)	43 (20.3)	27 (13.6)	116 (18.5)
	小さい	136 (63.0)	126 (59.4)	120 (60.3)	382 (60.9)
	なし	8 (3.7)	4 (1.9)	13 (6.5)	25 (4.0)
	分からない	26 (12.0)	39 (18.4)	39 (19.6)	104 (16.6)
	合計	216 (100.0)	212 (100.0)	199 (100.0)	627 (100.0)
集中力や記憶力、 責任感、創意力への効果	大きい	49 (23.1)	46 (21.7)	26 (13.1)	121 (19.4)
	小さい	126 (59.4)	126 (59.4)	109 (54.8)	361 (57.9)
	なし	16 (7.5)	15 (7.1)	30 (15.1)	61 (9.8)
	分からない	21 (9.9)	25 (11.8)	34 (17.1)	80 (12.8)
	合計	212 (100.0)	212 (100.0)	199 (100.0)	623 (100.0)
全校生への効果	大きい	29 (13.4)	23 (10.8)	16 (8.0)	68 (10.8)
	小さい	150 (69.4)	133 (62.7)	125 (62.5)	408 (65.0)
	なし	20 (9.3)	28 (13.2)	31 (15.5)	79 (12.6)
	分からない	17 (7.9)	28 (13.2)	28 (14.0)	73 (11.6)
	合計	216 (100.0)	212 (100.0)	200 (100.0)	628 (100.0)
子が音楽治療の対象者である場合の 勧奨意思	積極的に勧める	35 (16.4)	30 (14.2)	17 (33.3)	82 (13.2)
	子が希望すれば勧める	145 (68.1)	137 (64.6)	118 (51.3)	399 (64.0)
	ある程度勧める	22 (10.3)	28 (13.2)	41 (7.7)	90 (14.4)
	必要なし	11 (5.2)	17 (8.0)	24 (7.7)	52 (8.3)
	合計	213 (100.0)	212 (100.0)	200 (100.0)	623 (100.0)

表5 事後調査における音楽治療の効果に関する生徒の認識

単位：人 (%)

項目		学年			全体
		1	2	3	
音楽治療の効果	大きい	36 (15.6)	34 (14.9)	35 (16.4)	105 (15.6)
	小さい	140 (60.6)	120 (52.6)	102 (47.7)	362 (53.8)
	なし	28 (12.1)	24 (10.5)	40 (18.7)	92 (13.7)
	分からない	27 (11.7)	50 (21.9)	37 (17.3)	114 (16.9)
	合計	231 (100.0)	228 (100.0)	214 (100.0)	673 (100.0)
集中力や記憶力、 責任感、創意力への効果	大きい	29 (12.7)	16 (7.0)	30 (14.0)	75 (11.2)
	小さい	114 (49.8)	112 (49.3)	90 (42.1)	316 (47.2)
	なし	33 (14.4)	36 (15.9)	48 (22.4)	117 (17.5)
	分からない	53 (23.1)	63 (27.8)	46 (21.5)	162 (24.2)
	合計	229 (100.0)	227 (100.0)	214 (100.0)	670 (100.0)
全校生への効果	大きい	26 (11.3)	14 (6.1)	20 (9.3)	60 (8.9)
	小さい	103 (44.8)	85 (37.1)	72 (33.6)	260 (38.6)
	なし	40 (17.4)	58 (25.3)	54 (25.2)	152 (22.6)
	分からない	61 (26.5)	72 (31.4)	68 (31.8)	201 (29.9)
	合計	230 (100.0)	229 (100.0)	214 (100.0)	673 (100.0)
音楽治療への参加 意思	とても必要である	8 (3.5)	6 (2.6)	16 (7.5)	30 (4.5)
	必要である	117 (50.6)	98 (43.0)	81 (37.9)	296 (44.0)
	殆ど必要なし	53 (22.9)	60 (26.3)	66 (30.8)	179 (29.6)
	必要なし	53 (22.9)	64 (28.1)	51 (23.8)	168 (25.0)
	合計	231 (100.0)	228 (100.0)	214 (100.0)	673 (100.0)
乱打に対する評価	とてもよい	72 (31.4)	42 (18.4)	59 (27.6)	173 (25.8)
	よい	64 (27.9)	72 (31.6)	46 (21.5)	182 (27.1)
	ふつう	46 (20.1)	63 (27.6)	57 (26.6)	166 (24.7)
	関心なし	47 (20.5)	51 (22.4)	52 (24.3)	150 (22.4)
	合計	229 (100.0)	228 (100.0)	214 (100.0)	671 (100.0)

た。「集中力や記憶力、責任感、想像力への効果」に関しては、「大きい」と回答した生徒は75人(11.2%)であった。「全校生への効果」に関しては、「大きい」と回答した生徒は60人(8.9%)であった。「音楽治療への参加意思」に関しては、「必要である」と回答した生徒が296人(44.0%)と最も多く、「とても必要である」と回答した生徒と合計すると326人(48.5%)が肯定的な回答を示した。「乱打に対する評価」に関しては、「とてもよい」と回答した生徒が173人(25.8%)、「よい」と回答した生徒が182人(27.1%)であり、355人(52.9%)が肯定的に評価をし

たことが示された。

2) 保護者

音楽治療の効果などに関する認識を表6に示した。「音楽治療を必要とする原因」として、「情緒不安」が最も多く445人(70.0%)、次いで「消極的思考」が131人(20.6%)であった。さらに、学年別にみると、全ての学年で「情緒不安」が最も多く、「消極的思考」の順となっているが、それ以降に関しては1年生では3位「音楽勉強」、4位「いじめ」、2年生と3年生では3位「いじめ」、4位「音楽勉強」の順であった。

表6 事後調査における音楽治療の効果に関する保護者の認識

単位：人 (%)

項目	学年				全体
	1	2	3		
音楽治療を必要とする原因	情緒不安	159 (76.8)	157 (69.8)	129 (63.2)	445 (70.0)
	消極的思考	29 (14.0)	45 (20.0)	57 (27.9)	131 (20.6)
	音楽勉強	10 (4.8)	8 (3.6)	8 (3.9)	26 (4.1)
	いじめ	9 (4.3)	15 (6.7)	10 (4.9)	34 (5.3)
	合計	207 (100.0)	225 (100.0)	204 (100.0)	636 (100.0)
音楽治療の効果	大きい	25 (12.0)	29 (12.9)	32 (15.6)	86 (13.5)
	小さい	136 (65.4)	136 (60.4)	116 (56.6)	388 (60.8)
	なし	14 (6.7)	15 (6.7)	15 (7.3)	44 (6.9)
	分からない	33 (15.9)	45 (20.0)	42 (20.5)	120 (18.8)
	合計	208 (100.0)	225 (100.0)	205 (100.0)	638 (100.0)
集中力、記憶力、責任感、創意力への効果	大きい	31 (15.3)	36 (16.0)	19 (9.4)	86 (13.7)
	小さい	108 (53.5)	125 (55.6)	107 (52.7)	340 (54.0)
	なし	28 (13.9)	22 (9.8)	45 (22.2)	95 (15.1)
	分からない	35 (17.3)	42 (18.7)	32 (15.8)	109 (17.3)
	合計	202 (100.0)	225 (100.0)	203 (100.0)	630 (100.0)
全校生への効果	大きい	35 (16.9)	27 (12.0)	17 (8.3)	79 (12.4)
	小さい	103 (49.8)	104 (46.2)	95 (46.3)	302 (47.4)
	なし	27 (13.0)	28 (12.4)	33 (16.1)	88 (13.8)
	分からない	42 (20.3)	66 (29.3)	60 (29.3)	168 (26.4)
	合計	207 (100.0)	225 (100.0)	205 (100.0)	637 (100.0)
音楽治療が生活指導に有効である場合の勧奨意思	積極的に勧める	36 (17.8)	34 (15.2)	29 (14.4)	99 (15.8)
	勧める	103 (51.0)	100 (44.6)	99 (49.3)	302 (48.2)
	ある程度勧める	27 (13.4)	67 (29.9)	47 (23.4)	141 (22.5)
	関心なし	36 (17.8)	23 (10.3)	26 (12.9)	85 (13.6)
	合計	202 (100.0)	224 (100.0)	201 (100.0)	627 (100.0)
子どもが音楽治療の特別対象者である場合の勧奨意思	積極的に勧める	23 (11.3)	16 (7.1)	14 (7.0)	53 (8.4)
	子どもが希望すれば勧める	113 (55.7)	122 (54.2)	98 (48.8)	333 (52.9)
	ある程度勧める	37 (18.2)	50 (22.2)	57 (28.4)	144 (22.9)
	必要なし	30 (14.8)	37 (16.4)	32 (15.9)	99 (15.7)
	合計	203 (100.0)	225 (100.0)	201 (100.0)	629 (100.0)

「音楽治療の効果」に関しては、「大きい」と回答した保護者は 86 人 (13.5%) であった。「集中力、記憶力、責任感、創意力への効果」に関しては、「大きい」と回答した保護者は 86 人 (13.7%) であった。「全校生への効果」に関しては、「大きい」と回答した保護者は 79 人 (12.4%) であった。「音楽治療が生活指導に有効である場合の奨励意思」に関しては、「勧める」と回答した保護者は 302 人 (48.2%) であり、「積極的に勧める」と回答した保護者との合計は 401 人 (64.0%) であった。「子どもが音楽治療対象者である場合の奨励意思」に関しては、「子どもが希望すれば勧める」と回答した保護者は 333 人 (52.9%) であり、「積極的に勧める」との合計は 386 人 (61.3%) であった。

4. 音楽治療実施の前後比較

1) 生徒の音楽治療の認識

音楽治療活動の実施が生徒の認識に与える影響について検討を行うため、事前調査

と事後調査の比較分析を行なった (表 7)。その結果、「音楽治療の概念」に関して「よく分かる」と回答した者は、事前調査時の 33 人 (5.1%) から事前調査には 102 人 (15.2%) に有意な増加が示された ($p < 0.001$)。また、「少し分かる」と回答した者においても、198 人 (30.4) から 242 人 (36.0%) に有意な増加が示され ($p < 0.001$)、文化祭における音楽治療の実施が音楽治療概念の普及に寄与したことが示された。

「音楽治療の理解」についてみると、「よく分かる」と回答した者は事前調査時の 30 人 (4.6%) から事後調査時の 81 人 (12.0%) へと有意に増加し ($p < 0.001$)、「少し分かる」と回答した者についても 223 人 (34.3%) から 268 人 (39.8%) に有意な増加が示されており ($p < 0.001$)、一連の活動をとおして音楽治療に関する認識度が向上したことが示された。

その一方で、「音楽治療の必要性」及び「音楽治療への関心」に関しては、調査前後の

表 7 生徒の音楽治療への認識

項目	単位：人 (%)				χ^2	
	事前		事後			
音楽治療の概念	よく分かる	33	(5.1)	102	(15.2)	50.553***
	少し分かる	198	(30.4)	242	(36.0)	
	少し聞いてみたようだ	321	(49.3)	247	(36.7)	
	全然分からない	99	(15.2)	82	(12.2)	
	合計	651	(100.0)	673	(100.0)	
音楽治療の理解	よく分かる	30	(4.6)	81	(12.0)	35.348***
	少し分かる	223	(34.3)	268	(39.8)	
	全然分からない	121	(18.6)	107	(15.9)	
	よく分からない	227	(42.5)	217	(32.2)	
	合計	651	(100.0)	673	(100.0)	
音楽治療の必要性	とても必要である	76	(11.7)	68	(10.1)	7.191
	必要である	379	(58.3)	371	(55.1)	
	必要ない	66	(10.2)	100	(14.9)	
	よく分からない	129	(19.8)	134	(19.9)	
	合計	650	(100.0)	673	(100.0)	
音楽治療への関心	大いにあり	30	(4.6)	37	(5.5)	3.312
	少しあり	187	(28.8)	192	(28.6)	
	持って見る	231	(35.5)	211	(31.4)	
	あまりなし	202	(31.1)	231	(34.4)	
	合計	650	(100.0)	671	(100.0)	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

比較において統計学的に有意な差は示されなかった。

2) 生徒の音楽治療の効果に関する認識

生徒の音楽治療の効果に関する認識について検討を行うため、事前調査と事後調査結果の比較分析を行なった(表8)。その結果、「音楽治療による効果」が「小さい」と回答した者は、398人(61.1%)から362人(53.8%)に有意に減少しており($p<0.05$)、音楽治療の効果への否定的な期待が低下したことを示した。また、「集中力や記憶力、責任感、創意力への効果」に関しても、「小さい」と回答した者は342人(52.7%)から316人(47.2%)に有意に減少した($p<0.05$)。さらに、「音楽治療への参加意思」に関しては、「必要である」と回答した者は258人(39.8%)から296人(44.0%)に有意に増加したことが明らかとなった($p<0.05$)。

3) 保護者の音楽治療の認識

音楽治療の実施が保護者の認識に与える影響に関して検討を行うため、事前調査と

事後調査結果の比較分析を行った(表9)。

「音楽治療の概念」が「よく分かる」と回答した者は23人(3.7%)から50人(7.8%)に有意に増加し($p<0.001$)、「少し分かる」と回答した者に関しても150人(30.4%)から250人(31.3%)に有意に増加するなど($p<0.001$)、文化祭における音楽治療の実施が音楽治療概念の普及に寄与したことが示された。

「音楽治療の理解」に関しても、「よく分かる」と回答した者は184人(29.3%)から223人(34.9%)に有意に増加し($p<0.01$)、「少し分かる」と回答した者も15人(2.4%)から34人(5.3%)へ有意に増加したことから($p<0.01$)、一連の活動を通して認識度が向上したことが示された。その一方で、「音楽治療の必要性」に関しては、「とても必要である」と回答したものは86人(13.7%)から65人(10.2%)へ有意に減少し($p<0.001$)、「音楽治療への関心」についても「少しあり」と回答した者は361人(57.9%)から340人(54.0%)へ有意に減少した($p<0.001$)。

表8 音楽治療の効果に関する認識

		単位：人 (%)		
項目		事前	事後	χ^2
音楽治療の効果	大きい	101 (15.5)	105 (15.6)	10.763*
	小さい	398 (61.1)	362 (53.8)	
	なし	59 (9.1)	92 (13.7)	
	分からない	93 (14.3)	114 (16.9)	
	合計	651 (100.0)	673 (100.0)	
集中力や記憶力、責任感、創意力への効果	大きい	96 (14.8)	75 (11.2)	15.286**
	小さい	342 (52.7)	316 (47.2)	
	なし	104 (16.0)	117 (17.5)	
	分からない	107 (16.5)	162 (24.2)	
	合計	649 (100.0)	670 (100.0)	
音楽治療への参加意思	とても必要である	32 (4.9)	30 (4.5)	8.207*
	必要である	258 (39.8)	296 (44.0)	
	殆ど必要ない	217 (33.5)	179 (26.6)	
	必要ない	141 (21.8)	168 (25.0)	
	合計	648 (100.0)	673 (100.0)	

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

表9 音楽治療に関する保護者の認識

単位：人 (%)

項目		事前	事後	χ^2
音楽治療の概念	よく分かる	23 (3.7)	50 (7.8)	22.845***
	少し分かる	150 (23.9)	250 (31.3)	
	よく分からない	341 (54.3)	282 (44.1)	
	全く分からない	114 (18.2)	107 (16.7)	
	合計	628 (100.0)	639 (100.0)	
音楽治療の理解	よく分かる	184 (29.3)	223 (34.9)	13.752**
	少し分かる	15 (2.4)	34 (5.3)	
	よく分からない	276 (43.9)	244 (38.2)	
	全く分からない	153 (24.4)	138 (21.6)	
	合計	628 (100.0)	639 (100.0)	
音楽治療の必要性	とても必要である	86 (13.7)	65 (10.2)	14.141**
	必要である	373 (59.4)	380 (59.7)	
	必要なし	26 (4.1)	56 (8.8)	
	分からない	143 (22.8)	135 (21.2)	
	合計	628 (100.0)	636 (100.0)	
音楽治療への関心	大いにあり	121 (19.4)	86 (13.7)	18.368***
	少しあり	361 (57.9)	340 (54.0)	
	持って見る	61 (9.8)	95 (15.1)	
	あまりなし	80 (12.8)	109 (17.3)	
	合計	623 (100.0)	630 (100.0)	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

V 結論及び提言

1. 結論

本研究は、男子中学生の健全な情緒育成を目的として、文化祭において短期間に実施された音楽治療活動に関する生徒と保護者の認識を把握することにより、音楽治療に関する客観的な評価資料を提示した。

男子中学生は、短期間の音楽治療活動を通じて音楽治療への理解を深め、参加意思を高めた。保護者は、生徒の健全な情緒育成のために音楽治療が必要であると認識していた。また、音楽治療の必要性に関する認識を生徒と保護者の間で比較したところ、生徒よりも保護者の方が音楽治療活動への関心が高かったが、音楽治療の効果については保護者よりも生徒の方が肯定的であった。

2. 提言

音楽は、人間だけではなく動物や植物の成長にも良い影響を与えることが、多くの

研究結果から示されている。また、アメリカや日本といった先進国では、音楽治療活動が集中力や記憶力、自尊心、責任感の向上、及び情緒育成に有効であることが明らかになっている。さらに、多くの研究から、音楽治療療法を通じて、精神面のリフレッシュや気分転換、自己表現力や自制心等が高くなることが報告されている。

今後、学校教育課程に音楽治療を適切に導入し、音楽教師や生活主任教師の音楽治療への関心を増大させることにより、生徒がより情緒的に豊かで幸せな学校生活を送ることが可能になると考えられる。また、生徒が本調査のような調査への参加することは、音楽治療の認知度を更に上昇させ、中学生の情緒育成に寄与すると考えられる。

謝辞

本研究の投稿につきましては、新潟医療福祉大学学長である高橋榮明先生にご支援をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

ます。また、論文の作成につきましては新潟医療福祉大学社会福祉学部の藤澤由和先生、濱野強先生に感謝申し上げます。

文献

- 1) 尾形和子：登校を拒否した児童に対する音楽療法の有効性に関する研究，日本音楽療法学会第1回学術大会抄録集，2002.
- 2) 松井紀和：音楽療法手引，牧野出版，東京，1980.
- 3) 南銀祐，金惠敬：音楽治療の実施が脳卒中患者の血圧と脈拍に及ぼす影響，高神大学保健科学研究所，2001.
- 4) 金惠敬：韓国の音楽療法事情，あおぞら音楽社，東京，2002.